

じ意味で使っています。おそらく同じ語を繰り返したくないと思って、そう書いたのでしょう。」

〈注3〉 両語とも同じ数だけ用例をあげたが、集まった用例の数は「こらえる」のほうがかなり多い。約200の用例のうち「わきまえる」は約50である。

言語経歴：1955年神奈川県鎌倉市生

0歳～2歳鎌倉市

15歳まで埼玉県川口市

19歳まで埼玉県上尾市

25歳まで東京都調布市

25歳から埼玉県桶川市

(東京都立大学学生)

## たえる・こらえる・がまんする

篠崎 晃一

### 1. はじめに

人間は外界の状況に対して、快、不快、喜怒哀楽といった何らかの感情を抱く。また、その感情に応じて何らかの身体的反応を生ずることもある。例えば、おかしければ笑い、悲しければ涙を流す。しかし、逆に、感情の発散や行為の実現などをおさえることもある。「たえる」「こらえる」「がまんする」はいずれも、状況に対する反応をおさえたり、コントロールしたりする意味を表す語である。大まかにいえば、「現状の維持、持続」を表す、と行ってよいだろう。

国立国語研究所1964では、「たえる」「こらえる」はいずれも「2.3040努力・忍耐」に分類され、「がまんする」は名詞「がまん」で「1.3040自我・信念・努力・忍耐など」に分類されている。本稿では、これら三語の意味の異同について分析を行っていく。

表1

	たえる	こらえる	がまんする
「広辞苑」	こらえる・がまんする	がまんする	————
「学研」	こらえる・がまんする	がまんする	こらえる
「三国」	がまんする	がまんする	————
「詳解」	がまんする	がまんする	たえる
「岩波」	がまんする	がまんする	こらえる
「新明国」	がまんする	————	————
「現代」	こらえる・がまんする	たえる・がまんする	————

このように諸辞書の記述はほぼ同じである。ただ「新明国」では、「こらえる」「がまんする」について次のような記述がなされている。

「こらえる」

### 2. 従来の記述

従来の辞書においては、「たえる」「こらえる」「がまんする」を互いに言い換えて、意味の記述をしているものが多い。いくつかの辞書について、その実態をみてみよう。ここで取り上げるのは、「広辞苑第三版」「学研国語大辞典」「三省堂国語辞典第三版」「詳解国語辞典」「岩波国語辞典第三版」「新明解国語辞典第三版」「現代国語例解辞典」の七種である。(それぞれを「広辞苑」「学研」「三国」「詳解」「岩波」「新明国」「現代」と略す)。「たえる」「こらえる」「がまんする」が互いに入れ換えられて説明されているものをまとめたのが表1である(ただし、「がまんする」は名詞「がまん」で立項されているため、多少、事情が異なる)。

苦痛や不満などによって失われそうになる心身の安定を、なんとかして保とうと努力する。

「がまんする」

精神的肉体的に苦し(くて訴えた)い気持ちを発

散させないで押さえること。

この記述は、「心身の安定の保持」と「気持ちの発散の抑制」という観点から両語の意味的差異を示そうとしている点で注目される。この点も念頭におきながら、「たえる」を含めた三語の分析をおこなう。

### 3. 分析

#### 3.1. 主体

「こらえる」「がまんする」は「忍耐」という精神活動に密接に関係する意味の語であり、主体は基本的には人間に限られる(詳しくは後述する)。人間以外のものが主体の場合は、擬人法と捉えるべきであろう。

- (1) 太郎は 貧乏な生活に たえている。
- (2) 太郎は 笑いを こらえている。
- (3) 太郎は 空腹を がまんしている。
- (4) 草花が 風雪に たえている。

「たえる」の主体は無生名詞でもよい。実際「たえる」には「耐える」「堪える」の二通りの漢字表記があり、「耐える」で表記される場合は、主体に無生名詞をとり「性能の持続」を表す。

- (5) この乾電池は 長時間の使用に 耐える。
- (6) この容器は 高温に 耐える。

「こらえる」「がまんする」にこのような用法はない。したがって、ここでは主に主体が人間である場合について考察していくことにする。

#### 3.2. 構文

「たえる」「こらえる」「がまんする」は、「忍耐の対象」(以下、「対象」と略す)が表されることが多い。ただし、次の例のように対象が明確に表されない例もある。

- (7) (千代の富士に土俵ぎわまで押された朝潮が) 土俵から外へ出ないように こらえる。
- (8) 苦しいことがあっても がまんするんだよ。

この場合、自動詞として扱うべきかもしれない。しかし、この点については、これ以上たちらず、対象をとまなう場合を中心に考えることにする。

徳川・宮島1972で「『こらえる』『しのぶ』『がまんする』は、『～を』とむすびつくが、『たえる』は、ふつう『～に』とむすびつく。」(p.237)と指摘されているように、普通「たえる」の対象は二格名詞句で表され、「こらえる」「がまんする」の対象はヲ格名詞句で表される<sup>(註1)</sup>。

- (9) けがの痛みに たえる。
- (10) けがの痛みを こらえる。

- (11) けがの痛みを がまんする。

このことは、「たえる」と「こらえる」「がまんする」の意味の違いを考えるのに重要な意味を持つ。二格名詞句、ヲ格名詞句には、それぞれが担いする意味領域があると考えられるからである。

しかし、「がまんする」の不可能形「がまんできない」は、ヲ格、ニ格いずれもとることができる。もちろん、両者には意味の違いがある。

- (12) この寒さには がまんできない。

- (13) 彼の態度には もう がまんできない。

さらに、「NPデ がまんする」という形は、「(NPでは不本意ながら) NPでよしとする、妥協する」という意味を表す。

- (14) この絵で がまんしよう。

(15) 今日は ごはんとつけもので がまんしよう。デ格が、「がまんする」が本質的に要求する格かどうかは、「NPで満足する」「NPですませる」などの表現も含めて考える必要がある。ここでは、たちいて考えることはしない。

「たえる」「こらえる」「がまんする」は、対象が「文相当成分(S)+形式名詞ノ」(以下「Sノ」と略す)で表されることがある。その場合、「たえる」はヲ格をとることもある<sup>(註2)</sup>。

- (16) 太郎は 眠りたいのを たえる。

- (17) \*太郎は 眠りたいのに たえる。

- (18) 日差しが照りつけるのに たえる。

- (19) ?日差しが照りつけるのを たえる。

「こらえる」「がまんする」の場合は、対象が名詞で表される場合と変わらない(ただし、「Sノで がまんする」という形はない)。

- (20) 太郎は 泣きたいのを こらえる。

- (21) 太郎は 泣きたいのを がまんする。

- (22) 太郎が花子をいじめるのには がまんできない。

本来ならば、対象が名詞で表される場合と「Sノ」で表される場合とを区別して分析するべきであるが、後者の場合は「たえる」「がまんする」「こらえる」の意味そのものよりも、むしろ「Sノ」そのものの構文論的位置付けが問題となる。したがって、以下の考察では名詞、「Sノ」の区別にはこだわらない。必要に応じて説明を加えるにとどめる。

#### 3.3. 対象

##### 3.3.1. 「たえる」と「こらえる」

まずは、「たえる」と「こらえる」の意味の違いを考

える。先に述べたように、二格名詞句をとる「たえる」と、ヲ格名詞句をとる「こらえる」では、それに対応した意味の違いがあると考えられるからである。

- (23) 試練に たえる。
- (24) \*試練を こらえる。
- (25) 猛練習に たえる。
- (26) \*猛練習を こらえる。
- (27) 責任の重みに たえる。
- (28) \*責任の重みを こらえる。

対象となっている「試練」「猛練習」「責任の重み」は、主体に不快感、苦痛などを引き起こす誘因である。こうした「外部からの圧力」は「こらえる」の対象にならない。次の例もそのことを示している。

- (29) \*涙に たえる。
- (30) 涙を こらえる。
- (31) \*こみあげてくる笑いに たえる。
- (32) こみあげてくる笑いを こらえる。
- (33) \*怒りに たえる。
- (34) 怒りを こらえる。
- (35) 周囲の笑いに たえる。
- (36) \*周囲の笑いを こらえる。
- (37) 両親の怒りに たえる。
- (38) \*両親の怒りを こらえる。

「涙」「笑い」「怒り」は主体の内なる感情、主体内に生じた状況であるのに対し、「周囲の笑い」「両親の怒り」は、主体にとって苦痛を伴う外界の状況である。前者を「悲しい出来事」「おかしい出来事」「腹立たしい出来事」といった「誘因」によって引き起こされる「主体内の状況」とすれば、後者は「誘因」そのものである。つまり、「たえる」は、「外部からの圧力に対抗して、自己の状態を変化させないようにすること」である。本論の段階では、「変化」に関する精密な定義付けはしない。これは、「もつ」「もちこたえる」などの「維持動詞」と呼ぶべき動詞をも含めて議論すべき問題である。ここでは単に「現状を保つ」くらいの意味で用いている。

それに対して、「こらえる」は基本的には、「自己の動作を抑制すること」である。そのことは、自己の意志とは無関係に起こる生理現象においては、明らかである。

- (39) \*くしゃみに たえる。
  - (40) くしゃみを こらえる。
  - (41) \*あくびに たえる。
  - (42) あくびを こらえる。
- (39)(41)が言えるとすれば、「周囲で連発されるくしゃ

み(あくび)」に不快感を感じる場合、もしくは「(主体自身の)どうにもとまらぬくしゃみ(あくび)」に苦痛を感じる場合であり、「くしゃみ(あくび)」に対抗しているのである。それに対し、(40)の場合は、「(主体自身がくしゃみをしそう状況で)くしゃみをするのを抑制する」ことを意味する。(42)についても同じことである。つまり、「くしゃみ(あくび)」という動作そのものが不本意な動作であり、それを抑制するわけである。

さらに、「くしゃみ(あくび)がでそう」な状況は、主体の意志に関係なく生ずるものである。つまり、「こらえる」が意味するのは、「主体の意志に関係なく起こる主体内の状況によって、主体が不本意な動作を起こさないようにすること」である。「動作を起こさないこと」が重要なのであって、「主体内の状況」そのものは一種の極限状態にあって、抑制の対象にはなりえない。このことは「がまんする」との対比で3.3.2.で見ると「たえる」「こらえる」いずれの対象にもなるものがある。

- (43) 悲しみに たえる。
- (44) 悲しみを こらえる。
- (45) 痛みに たえる。
- (46) 痛みを こらえる。

いうまでもなく、「悲しみ」「痛み」は主体の意志に関係なく生ずるが、(43)は、「悲しい」という状況に対抗している、という意味であり、(44)は、「悲しみが表に現れることを抑制する」という意味であろう。同様に、(45)は、「痛みそのものに対抗する」という意味であるが、(46)は、「痛みの結果生ずる動作を抑制している」という意味であろう。

この場合、ヲ格名詞句で表されるのは、実際の抑制の対象ではない。現実には抑制の対象となるのは、ヲ格名詞句で表される主体内の状況が主体にさせようとする動作である。例えば、「悲しみをこらえる」は「悲しみが原因でしそうな動作をおさえる」という意味あいである。

なお、モノを表す名詞は、主体内の状況を表すことはできず、それゆえ「こらえる」の対象となることはできない。「Sノ」の形で、主体内の状況を叙述するようにすれば、「こらえる」の対象にすることができる。

- (47) \*酒を こらえる。
- (48) \*煙草を こらえる。
- (49) 酒を飲むのを こらえる。
- (50) 煙草を吸うのを こらえる。
- (51) 酒を飲みたいのを こらえる。

(52) 煙草を吸いたいのを こらえる。

(49)(50)を不自然とする見方もある。確かに「酒を飲む」「煙草を吸う」ことは主体の意志的な動作であり、「くしゃみ(あくび)をこらえる」のように、「主体の意志に関係なく、酒(煙草)に手がでそう」な状況は普通考えられない。しかし、そこまで読みこめば、可能な言い方かもしれない。むしろ、それよりも、(49)(50)が自然だという見方は、(51)(52)の意味を読みこんでいると考えられる。対象が名詞で表される場合と「Sノ」で表される場合との違いは、微妙な点があるとみられる。

「たえる」は、先に述べたように、「外からの圧力、外的な困難に対抗して、自己を変化させないようにすること」を表す。したがって、その対象は「対処する」に足るような困難でなければならない。また、主体にはある程度の「対処のための能力」が要求される。

(53) このような寒さには たえられない。

は、主体自身の能力が限界にきている、という状態である。また、3.1.であげた

(54) この乾電池は 長時間の使用に 耐える。

(=5)

(55) この容器は 高温に 耐える。(=6)

のような、無生名詞の「性能の持続」を表す用法も、このような「たえる」の意味の延長線上にあるものといえる。主体が「人間」であろうと「無生物」であろうと、「外からの圧力に対抗し、自己の状態を変化させないでいること」ができれば、「たえる」ことになるが、主体が「人間」の場合には普通「忍耐」という精神活動を伴うということにすぎない。「たえる」そのものは、「忍耐」という精神活動そのものを指す語ではないとみるのが穏当であろう。

それに対して、「こらえる」は「主体の意志に反する主体自身の動作をおさえる」ことを意味する。したがって、その主体には、「意志に関係なく何かが生じたこと」及び、「それが自分にある動作をさせようとしていること」を察知できる能力が要求される。無生名詞が「こらえる」の主体になりえないのは、このためである。

### 3.3.2. 「がまんする」

次に、「たえる」「こらえる」と「がまんする」との違いをみる。ただし、「がまんする」の主体が「人間」に限られることから、以下の例では主体が人間の場合に限ることにする。

結論から言えば、「がまんする」の意味は「あるモノ、ある状況を対象に『忍耐』という精神活動をする

こと」と考えるべきだと思われる。当然、「忍耐」とはどのような精神活動か、ということが問題になるが、大まかに言えば、「不本意な状況をそのままにしておく」ことだということになろう。

「がまんする」のこのような意味は「NPで がまんする」という形に端的に現れる。

(56) この絵で がまんしよう。(この絵は気に入らないが がまんしよう。)

このような場合、状況を受け入れるのに、そう努力が要求されるわけではなく、「妥協」という意味あいが強くなる。

ただ、デ格で表すことができるのは、主体による状況の改善が可能な場合に限られる。したがって、

(57) \*この寒さで がまんする。

のように、主体による改善が不可能な場合は、不適格となる。

「がまんする」は「たえる」「こらえる」に相通ずる性質を持つ。例えば、

(58) 咳を がまんする。

は、二通りの意味がある。。

(59) がまんして 咳をださないようにする。

(60) 他人の咳を がまんして そのままにしておく。

この意味の広さが「がまんする」の特徴であるし、「あるモノ、ある状況を対象に『忍耐』という精神活動をする」「不本意な状況をそのままにしておく」という大まかな捉え方をする理由である。

「がまんする」が「たえる」「こらえる」に通ずる性質を持つことは、不可能形「がまんできない」では格助詞の違いとして現れる。

(61) 痛みを がまんできない。

(62) 痛みに がまんできない。

「がまんする」が(61)では「こらえる」に近い意味あい、(62)では「たえる」に近い意味あいで用いられている。つまり、「たえる」と二格、「こらえる」とヲ格という結びつきが、「がまんできない」の場合にも反映されているといえる。このこと自体、興味ある問題であるが、ここではこれ以上たちいらない。

もちろん、「たえる」「こらえる」と「がまんする」には大きな違いがある。

まず、「たえる」「こらえる」は、「懸命に」「必死に」などの副詞ときわめて自然に共起する(もちろん、「たえる」の主体が無生名詞の時共起することはない)。むしろ、「たえる」「こらえる」自体に、そのような意味が含まれていると考えることができる。しかし、「が

まんする」自体は「懸命に」「必死に」という意味あい  
はないらしく、「たえる」「こらえる」と同じ状況であ  
ることを意図的に示すためには、「懸命に」「必死に」  
などの副詞を補うことが必要である。

(63) 酒を飲みたいのを がまんする。

(64) 酒を飲みたいのを こらえる。

(65) 酒を飲みたいのを 懸命に がまんする。

もちろん、(63)は(64)の意味にも解釈できるが、また「と  
りあえず酒を飲まないでおこう」くらいの意味にも解  
釈できる。「こらえる」を用いた(64)に、そのような意味  
あいはない。「がまんする」で同様の状況を叙述するに  
は、やはり(65)のように副詞を補う必要があろう。

また、「ひとまず／とりあえず／さしあたって～し  
ておこう」という「暫定的な措置」を表す文脈におい  
て、「がまんする」はそう不自然ではない。しかし、「た  
える」「こらえる」は不自然である。

(66) \*ひとまず たえておこう。

(67) \*ひとまず こらえておこう。

(68) ひとまず がまんしておこう。

「暫定的な措置」というのは、一種の「妥協」であ  
る。「たえる」「こらえる」は、外界の状況、主体内の  
状況に積極的にかかわるといふことであり、「妥協」と  
は相入れない性質を持つのである。いいかえれば、「た  
える」「こらえる」は、一種の極限状態にあることを同  
時に含意する。「たえる(こらえる)のをやめると同時  
に主体が変化してしまう(動作をしてしまう)」という  
状況である。よって、状況に積極的にかかわらざるを  
えないのである。

しかし、「がまんする」は必ずしも、そのような状態  
にあることは意味しない。むしろ、「不本意な状況をそ  
のままにしておく」ために、かなりの努力を要するこ  
ともあれば、たいして努力を要しないこともある、と  
いうだけのことである。前者の場合「忍耐」という意  
味になり、後者の場合「妥協」という意味が生ずるわ  
けである。

「不本意な状況をそのままにしておく」ためには、何  
らかの自己抑制が要求されることが多い。そのため、  
「こらえる」と「がまんする」は類似の意味を帯びるこ  
とになる。例えば、

(69) 咳を こらえる。

(70) 咳を がまんする。

(71) くしゃみを こらえる。

(72) くしゃみを がまんする。

これらは「今にも咳(くしゃみ)が出そうな主体自  
身の状況」で「咳(くしゃみ)がでないようにする」

という意味で用いることができる。しかし、(69)(71)はその  
ような極限としての状況でなくても用いることができ  
る。「咳(くしゃみ)をださないでおく」くらいの軽  
い意味あいでも用いることも十分可能であろう。もち  
ろん、「周囲の咳(くしゃみ)にたえる」「とまらぬ咳  
(くしゃみ)にたえる」という意味あいにも解釈でき  
ることは、先に見たとおりである。

そのことは、次のように対象を「Sノ」で表した場  
合、よりはっきりする。

(73) 咳がでるのを こらえる。

(74) 咳がでるのを がまんする。

(73)は、「咳がでそうなのを、おさえる」という意味し  
か考えられないが、(74)は「咳がでてしかたがない」  
という状況に「たえて」いる、という意味にも解釈で  
きよう。つまり、「がまんする」は、かなり中立的な意  
味を担っていると考えられるのである。

しかし、

(75) 涙を こらえる。

(76) \*涙を がまんする。

では、「がまんする」は不自然である。考えてみれば、  
「涙が出る」というのは抑制するのがかなり困難な  
動作である。より厳密に言えば、「涙が出そうな」状況  
というのは極限状態に近い、つまり、(悲しみ、スモ  
ッグなどの主体の意志とは関係ない)「涙を流す」要因  
を抑制できないような段階にある、と考えられる。それ  
ゆえ、「がまんする」はふさわしくないのだと思われる。

「がまんする」の対象はモノを表す名詞によって表さ  
れることがある。

(77) 酒を がまんする。

(78) 煙草を がまんする。

これらの文は、「酒、煙草を忍耐の対象にする」とい  
う抽象的な意味が根底にあって、何らかのプロセスを  
経て、「酒が飲みたい(煙草が吸いたい)」という欲求を  
コントロールする」という意味に解釈されるのであ  
ろう。「酒が飲めない状況(煙草が吸えない状況)を不  
本意ながら受け入れる」ためには、欲求を抑制しなけ  
ばならないのである。

(79) 酒を飲みたいのを こらえる。

(80) 酒を飲みたいのを がまんする。

(79)は、「酒を飲みたい」という主体の意志とは関係な  
く生ずる欲求によってなされる動作、すなわち「酒を  
飲む」という動作を抑制する、という意味である。ヲ  
格で表されるものは、実際の抑制の対象ではなく、む  
しろ、抑制の対象となる動作をひきおこすものである。  
このことは「痛みをこらえる(=46)」でも見たところ

である。それに対し、(80)は、「酒を飲みたいという欲求をコントロールする」くらいの意味で、動作そのものを抑制するというのではない。

つまり、「こらえる」はあくまで「動作」を抑制することであって、その動作を起こす要因となっているものは主体には抑制できない状態にある。それに対して、「がまんする」は動作を起こす要因そのものをコントロールすることである、といえる。

「がまんする」の主体が基本的に人間に限られるということも、「忍耐の対象とする」「妥協する」「コントロールする」という意味をもつ語だからであるといえよう。

#### 4. まとめ

以上の分析から、「たえる」「こらえる」「がまんする」の意味特徴は、次のようにまとめられよう。

「たえる」

外からの圧力に対抗し、主体自身の状態を変化させないでいること。

「こらえる」

主体の意志に関係なく起こる主体内の状況によって、主体が不本意な動作を起こさないようにすること。

「がまんする」

状況を不本意ながら受け入れて、その状況を維持すること。

<注1> 「新明国」で用例にあげられている、「けがの痛みをたえる」も、若干なじみにくい、適切な文であろう。しかし、ここでは扱わない。

<注2> 対象として「Sノ」が不自然な場合も多い。

(81) \*周囲から笑われるのを たえる。

(82) \*周囲から笑われるのを こらえる。

(83) \*周囲から笑われるのを がまんする。

(84) \*両親から怒られるのを たえる。

(85) \*両親から怒られるのを こらえる。

(86) \*両親から怒られるのを がまんする。

<注3> 3.2.で「こらえる」の自動詞的な例とした(7)でも、この意味は保たれていて、「がまんする」といいかえることはできない。

(87) (千代の富士に土俵ぎわまで押された朝潮が)土俵から外へ出ないように こらえる。

(88) \* (千代の富士に土俵ぎわまで押された朝潮が)土俵から外へ出ないように がまんする。

言語経歴：1957年6月 千葉県市川市生 現在に至る。

(東京都立大学大学院学生)

## 「とおる」「すぎる」「ぬける」と中国語語彙との対照

閻 小妹

### 1. はじめに

本稿では、日本語の「とおる」「すぎる」「ぬける」三語を取り上げて、これらに対応すると思われる中国語語彙を比較分析してみたい。ここで分析するに際して、移動の場合に限って進めていきたい。「盛りをすぎる」「鼻がとおる」「栓がぬける」などの用法に今回ふれないことにする。

日本語の「とおる」「すぎる」「ぬける」に関する記述及び意味論研究については、森田1977、柴田編1979、国広編1982、杉本1984等を参考にした。

### 2. 辞書の記述

まず、『日中辞典』、『新日漢辞典』の記述をみよう。ここは、やはり移動に関するもののみを掲げる。

「とおる」に対応する中国語語彙が次のようである。

「過」「通過」「穿過」

「すぎる」に対応する中国語語彙が次のようである。

「過」「通過」「經過」「越過」

「ぬける」に対応する中国語語彙が次のようである。

「過」「通過」「穿過」

さらに、以上掲げられたいくつか、中国語の動詞の意味記述をみよう。

「過」 從一個地点或時間移到另一個地点或時間，經過某個空間或時間。(ある所、あるいは、時間から、他の所、時間へ移動する。ある空間、あるいは時間を經過する。)

「通過」 從一端或一側到另一端或另一側。(ある一端、こっち側から、他の一端、向う側に至る)